皇大神宮別宮

伊雑宮（いざわのみや）

参拝のしおり

神宮司廳

皇大神宮別宮　伊雑宮

一、御祭神

伊雑宮は、一般には「イゾウグウ」とよばれ、皇大神宮（内宮）の別宮で古くから「天照大神の遙宮」と称せられ、御祭神は天照坐皇大御神御魂です。恒例および臨時の祭典は、内宮に準じて行われ、二十年ごとに式年遷宮も行われます。

二、御鎮座地

三重県志摩市磯部町上之郷

（交通案内）内宮より三重交通バス伊勢道路経由約三十分川辺下車徒歩約十分、または近鉄志摩線上之郷駅下車徒歩約五分で社頭に達します。

三、御鎮座の由来

当宮の創祀は、約二千年前の第十一代垂仁天皇の御代のことです。皇大神宮御鎮座の後、倭姫命が御贄地（皇大神宮へ奉る御供物を採る所）をお定めになるため、志摩国をご巡行の際に、伊佐波登美命が奉迎して、この地に当宮を創建して、皇大御神の御魂をおまつりしたと伝えられています。万葉集に「御食つ国、志摩の海人ならし、真熊野の小船に乗りて、沖辺漕ぐ見ゆ」とも歌われているように、志摩国は風光麗しく、海産物に富み、古来神宮と朝廷のご料を貢進した地です。

四、域内の案内

入口の鳥居を参入すると左側には衛士派出所、右側に宿衛屋があります。宿衛屋ではご祈祷（御饌）の取り次ぎ、大麻、守祓の授与、御朱印の押捺等をお取り扱いしております。手水舎で手と口を浄め、参道を進むと右側に神饌を調理する忌火屋殿、その奥に祓所及び御倉があります。さらに進むと正殿の御前に達します。

正殿の構造は内宮に準じ、唯一神明造で、御屋根の鰹木は六本、東西両端には内宮と同じく内削ぎ（水平切）の千木が高く聳え、南面して建てられています。周囲には内から瑞垣、玉垣の二重の御垣があり、それぞれ御門があります。正殿横の空地は古殿地といい、二十年毎に新しいご社殿を造営して、東西交互に式年遷宮を奉仕するご用意の御敷地です。

五、恒例のお祭

一月	一日	午前八時	歳旦祭
一月	三日	午前八時	元始祭
二月	十一日	正午	建国記念祭
二月	二十日	午前八時 午前十時	大御饌奉幣
五月	十四日	午前十時	祈年祭 風日祈祭
六月	二十四日	午前十時	由貴夕大御饌
二十五日		午前二時 午前十時	由貴朝大御饌奉幣
八月	四日	午前十時	月次祭 風日祈祭

伊雑宮正面入口

伊雑宮の遠望
真ん中のこんもり茂った森が伊雑宮。

十月二十四日　午後十時　由貴夕大御饌
十月二十五日　午前二時　由貴朝大御饌
　　午前十時　奉幣
十一月二十六日　午前八時　大御饌　神嘗祭
　　午前十時　奉幣
十二月二十三日　午前十一時　新嘗祭
　　午後十時　由貴夕大御饌
十二月二十四日　午前二時　由貴朝大御饌　天長祭
十二月二十五日　午前十時　奉幣　月次祭

六、特殊祭典

御田植式　伊雑宮の御田植式は志摩地方随一の大祭で、「磯部の御神田」として国の重要無形民俗文化財に指定されています。宮域の南に隣接するご料田（作付面積一、六四三㎡）で毎年六月二十四日（六月月次祭当日）に行われます。

鎮座地志摩市磯部町の人々が、地区ごとに毎年交代して奉仕します。極めて古雅な神事で、日本三大田植祭の一つといわれています。式は午前十時頃から始まり、全部終るのは午後四時をすぎます。式次第はまず奉仕員一同そろって伊雑宮に参拝、修祓を受けて御田に向います。その順序は先頭に、杈指二人、立人六人（以上は二十歳代の青年で、菅笠を戴き中形の襦袢を着て、紺の股引に手甲をつけます）。次に早乙女六人（十二、三歳から十五、六歳の少女で、顔に白粉をつけ、まゆをひき、菅笠を被り、白装束の上に緋の襷をかけます）。その後を、ささら擢二人（十歳前後の少年で菅笠を被り、モスリンの派手な襦袢に紫色の脚絆をつけます）。ついで、太鼓打一人（七、八歳の童男で、かつらを被り、作り眉をして少女に扮装し、御田の中では田船に乗ります）。次に笛二人、太鼓一人、小鼓一人、謡六人（以上十人は青年男子にて素襖烏帽子を着けます）。行列は以上の通りで、一同跣足です。御田の西側の畦に長さ十一mほどの太い青竹一本が杭に縛って立てられ、竹の先端に大うちわ（ゴンバウチワという）がつけられています。

御田植式　笛や太鼓のお囃しのなか、
苗が手際よく植えられてゆく。

御田植式　竹　取　り

やがて立人、早乙女等が御田に下り、手を取り合い苗場を三周半し、苗取りが始まります。苗取りが終ると立人が青竹を杭から解き、三度扇いで御田の中心に向って倒すと、近郷漁村の青年たちが下帯姿になって田に入り、竹の奪い合いを行います。その争奪の有様は頗る勇壮です。その竹を持ち帰って船霊に祭り大漁満足、海上安全のお守りにする信仰があります。

竹取りが終るといよいよ御田植が始まり、一列に並んで植えながら退いて行きます。その間、謡方、鼓方、笛方、ささら方、太鼓方が調子をそろえて囃し立てます。半分を植え終った頃、一旦休憩し、ささら方二人が田の中で舞踏をします。これを早取挿といいます。この間一同、若布の肴で小宴を行います。さらにつづいて残りを植え終ります。そのあと一同列を整え、「踊り込み」という躍りで練りながら再び伊雑宮に進み童男の納めの仕舞で御田植式が終ります。

なお、お田植装束類は近くの志摩市立磯部郷土資料館に展示されていますので、いつでも見ることが出来ます（月曜、祝日は休館）。

調献式　調献式は十月二十五日（神嘗祭当日）に志摩地方の人々が、海幸山幸をご神前にお供えして、神恩感謝の誠を捧げる志摩一円の秋祭です。

御　祭　旧暦の六月二十五日に崇敬者の夏祭りが執り行われます。

七、崇敬者

志摩市内の崇敬者を主とする伊雑宮奉賛会を始めとし、漁師や海女たちの信仰も厚く、三重県下はもとより全国各地にも崇敬者が多数おられ、講社を組織して団体で参拝する奉賛者もすくなくありません。

八、伊雑宮所管社　佐美長神社

伊雑宮の南約八百メートルの地に鎮座し、大歳社または穂落社とも称えられます。倭姫命が志摩国ご巡行の際、鳥の鳴く声高くきこえて夜昼止まないので、これを見に行かせると、葦原の中に一株の稲が生えており、根本は一本で穂が千穂にも分かれて茂っていました。一羽の真名鶴がその穂をくわえて飛びながら鳴いているのを発見し、この鶴を大歳神（五穀の神）と崇めて、この地におまつりしたと言い伝えられています。土地の人々は今も地主の神として崇め、地鎮・方除等の信仰があります。

なお同社の御前に小祠四社の佐美長御前神社がおまつりされています。

お田植歌

一、目出度目出度の御神田を植えて　踊り込むぞえ宮様へ〈

一、今年しゃ豊年穂に穂がさいて　桝は取り置け箕で量る〈

一、杁立人早乙女たちが　植える姿は百合の花〈